

## 八潮新校準備委員会（第3回） 議事録

- 1 日 時 令和5年11月29日（水） 午後3時開会  
午後4時40分終了
- 2 会 場 県立八潮南高等学校大会議室
- 3 出席委員 依田委員長、町田副委員長、白井副委員長、菊池委員、栗田委員、  
藤波委員、砂賀委員、北島委員、福良委員、廣川委員
- 4 事務局 魅力ある高校づくり課 栗藤、中島、坂本、高辻、橋本
- 5 協 議 「八潮新校（仮称）基本計画（案）」について  
依田委員長 それでは次第2、協議に入ります。まず、協議に当たって事務局から資料の概要について説明をお願いします。  
事務局 （資料の概要について説明）  
依田委員長 事務局から資料の概要について説明がありましたが、何かございますか。よろしいでしょうか。それでは、【資料1】八潮新校（仮称）基本計画（案）について、事務局から説明をお願いします。  
事務局 （八潮新校（仮称）基本計画（案）について説明）  
依田委員長 全体を通して、今、事務局から説明がありましたが、それではまず、全体を通して何かお気づきのこと、御質問、御意見等があれば、いただきたいと思えます。その後、分野を区切って伺うようにしますが、この時点で何かございますでしょうか。はい。よろしいでしょうか。それでは、ページごとに区切って、お話をいただいいていこうと思えます。資料1に基づいて、参考資料1を適宜御覧いただきながら、進めてまいりたいと思えます。まず1ページですが、1 策定に当たっての基本姿勢という部分と、2 新校の基本的枠組みについてです。特にこの基本的枠組みのところは、学科の名称や、それぞれ120人、3クラスずつの募集ということとまとめさせていただいておりますが、前回は御意見をいただいているところがございます。こちらについて、まず伺ってまいりたいと思えます。いかがでしょうか。はい。北島委員、お願いします。  
北島委員 具体的に、男女の比率などは出ていますか。  
依田委員長 はい。では、男女の比率について、事務局から説明をお願いします。  
事務局 はい。御質問ありがとうございます。埼玉県ではどこの高等学校もそうですが、男女の共学で募集をするとした場合、男女比の決まりはありません。もしかしたら男子が多く入学するかもしれませんが、女子が多く入学するかもしれませんが、それはそのときの選抜に依ります。

北島委員 分かりました。ありがとうございます。

依田委員長 ないということですか。

事務局 はい。

依田委員長 はい。その他、いかがでしょうか。前回、砂賀委員から、普通科のクラス数についての御意見を賜ったかと思えます。事務局でいろいろ検討したところだと思えますが、いかがでしょうか。

砂賀委員 八潮市の中学生が入試の際に、今まで、八潮高校と八潮南高校と、ということで結構希望者が、地元なので多いです。できるだけその希望を、真面目に一生懸命がんばっている子供たちが多くです。現行の八潮南高校は、普通科は2クラスかと思えます。ですので、できたらもう少し幅を持たせられると有り難いという感じが、中学校側の意見としてはあります。120人からもう少し、幅を持って募集していただくと有り難いと思えます。

依田委員長 はい。では、事務局に伺います。ビジネス探究科3クラスを動かさないと普通科を4クラスにするというのは、考えられなかったですか。

事務局 キャパを純増する、つまり7クラスを収めるということかと思えます。八潮南高校の過去の募集人員を考えますと、確かに最大8クラス、あるいは7クラスという時代もありました。ただ、現在とその頃の状況は大分違いまして、少人数で展開する授業であったり選択科目によって教室を分けなければならなかったりと、いろいろありまして、現行の八潮南高校のこの施設・設備ですと、7クラスだと少し厳しいのかなということ、学校から伺っているところです。ですので、普通科のニーズが今の中学生にはすごく高いというのは、事務局としても理解しているところです。現行、八潮南高校が普通科2クラス、八潮高校は体育コースもありますが、普通科4クラス、併せて6クラスあったのが、新校を開くときには3クラスになってしまうという御心配、中学生の選択が狭まってしまうのではないかという御心配かと思えますが、この地域の過去の志願状況やこの先の人口の状況など、いろいろ勘案する中では、3クラスでもなんとか収まるのかなと考えたところです。

依田委員長 砂賀委員、いかがでしょうか。

砂賀委員 生徒数が年々減ってきているというのはありますが、ただ、結構、受け皿ではありませんが、地元に行きたいという子供たちが行けないというのも、なかなか中学校側としても厳しい部分もありますので、もし可能であればということで、意見としてお伝えさせていただきました。

依田委員長 承知いたしました。新校としてスタートして、毎年毎年、希望者の数が出てくるかと思えますので、募集クラス数については、長い学校の歴史の中で、状況に合わせていくということもございますので、その辺は、県教育委員会としても、注視をしていく必要があると思っております。

砂賀委員 よろしくお願ひします。

依田委員長 こういった御意見があったということは、新校基本計画検討委員会にも再度、お伝えいただければと思えます。はい。その他、いかがでしょうか。学科名については、ビジネス探究科という名称で再度出ておりますが、これについてはよ

ろしいでしょうか。

(了承の声)

依田委員長 はい。御理解いただき、ありがとうございます。それでは、2ページにまいりたいと思います。上段、3校名につきましては、先ほど簡単に触れさせていただきましたが、来年度の作業になってまいりますので、皆様方には、また御協力をお願いしたいと思います。4 基本理念、5 教科指導等の基本方針の(1)、(2)の部分です。前回も多様な御意見をいただいたところですが、このような文章となっております。いかがでしょうか。よろしいでしょうか。また最後にまとめて御意見をいただくようにしたいと思っておりますので、途中でお気づきのことなどは、その際に御発言いただけるようにしたいと思います。それでは、先に進みたいと思います。3ページを御覧ください。教科指導等の基本方針の(2)教科指導、(3)生徒指導、(4)進路指導、(5)生徒募集の部分です。基本方針ですので、具体的なことはその次に記載があります。方針としての文章ですが、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、下段、6 教育活動等の基本方針の具現化にまいります。(1)教科指導です。前回、学科を超えた学びや、普通科とビジネス探究科がどのように学び合っていくのかという観点からの御意見をいただいたところでございます。最終的にこのような表現にさせていただいておりますが、いかがでしょうか。それでは、私から事務局に伺いたいと思います。株式会社の設立について、前回もお話いただきましたが、その準備など、これについて研究など進めている部分はありますか。何か新たな情報があれば言っていただければと思います。

事務局 はい。こちらについては、先進的な取組を行っている他県の学校を視察に行っております。その際には、事務局である魅力ある高校づくり課の職員に加えて、八潮南高校の教員、それから、栗田委員にも一緒に行っていただきました。具体的には、岐阜県立岐阜商業高校というところに行って視察をしてきました。現在、栗田委員のところに研修に行っている教諭がいます。八潮南高校の商業科の教員です。栗田委員の御指導のもと、具体的にどういった授業が可能か、実際に株式会社の運営を生徒に体験させるためにはどうすれば良いのかということも、準備を進めていただいていると聞いております。先日、研修をしている教諭のところ、私も、どういう状況かを聞きに行きましたが、その教諭としては、不安な部分もある一方、大変積極的に、なんとかこのミッションにある、株式会社をやりたいと言っております。ですので、そういった準備は着々と進んできていると捉えております。

依田委員長 その岐阜商業高校は、いわゆる株式会社を作っているのでしょうか。

事務局 はい。ちゃんと登記をしております。株式会社を立ち上げるということにすごく大きな学びあるのですが、今は、立ち上げてからずっと法人として会社を運営し続けているので、立ち上げた経験を持った生徒や職員の方は既になくなっていたりしますが、会社の運営は、実際に行っており、配当も出していると聞いております。

依田委員長 という学校に視察に行ったということです。いかがでしょうか。よろし

いでしょうか。はい。それでは、4ページを御覧いただきたいと思います。(2)生徒指導、(3)進路指導、(4)生徒募集、(5)その他までございます。前回は、生徒指導などでも、生徒に寄り添った、八潮高校の良い取組などについて御意見をいただいたところかと思えます。自転車ヘルメットの話なども、前回伺ったところです。交通ルール・マナーの徹底というところで、御趣旨を表現したのかなと思えますが、こういった表現でよろしいでしょうか。はい。それでは、5ページにまいりたいと思います。7 開校準備です。(1)の施設・設備の整備期間については、開校後も引き続きということで、令和6年度から9年度の期間となっております。(2)については、両校の卒業生に関わる卒業証明書などの発行については、新しい学校が担っていきまうところとあります。(3)、新校の生徒募集についても、八潮南高等学校が中心となって、両校が協力しながら行っていくということです。(4)校章、校歌、制服等とありますが、これについても、対象校と書いてありますが、両校の協議のもとで進めていくこととなります。校章、校歌、制服等というのは、時期的にはだいたいいつぐらいの時期に検討を進めるものなのでしょうか。

事務局 校章や校歌などについては、割と、開校される前年、直前になる可能性があります。制服については、業者を選定したり、デザインをどうするかという検討もありますので、来年くらいからそういった検討を始めていくということになるかと思えます。度々出てきますが、来年度になりますと、新校開設委員会という、これまでの準備委員会、検討委員会に続く3番目の委員会が立ち上がります。これは、八潮南高校の校長先生を委員長に、八潮高校の校長先生が副委員長になり、両校の管理職が委員になります。そしてその下に、それぞれの所属職員がぶら下がっているようなイメージです。両校を挙げて、新しい学校づくりの細かいところをいろいろ検討していきます。最大のところでは、教育課程を組み上げていくということが、大事なミッションになりますが、その委員会の中に、校章や校歌や制服をどうするかといった検討も入ってきます。

依田委員長 この辺、生徒たちにとっては重要なところになってくるかと思えます。7 開校準備の部分につきまして、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。はい。それでは、8、9、10、最後、5ページから6ページにかけての部分になります。8については、新校が開校した後、八潮南高校の生徒は新校の生徒となるわけですが、不利益がないように十分配慮していくということになります。もちろん、八潮南高校の生徒についても、そうしたことがないように十分配慮していくということになります。9 教育環境の整備につきましては、様々な御意見を皆様からいただいて、新校基本計画ができましたら、県の教育委員会が一体となって、その基本計画の実現に向けて努めていく、予算面も含めて努めていくという規定となっております。10の(1)跡地の利活用については、八潮高校の校舎、土地、そうした部分について、県は八潮市と協議をしていくという記載となっております。(2)同窓会及び後援会については、それぞれの同窓会、後援会で、その後の運営について御検討いただきたいということになります。(3)対象校が保管する物品等の保存についても、それぞれの関係者の中での検討を尊重させていただくということで、県が何か一方的に

決めるということはありませんということです。この辺りは細かな規定になります  
が、皆様から何かございますか。はい。菊池委員、お願いします。

菊池委員 記載事項そのものについてはありませんが、10 付随する事項の(1)跡地  
の利活用のところで、今回、八潮市と協議しながらということで記載いただきました。  
その点につきまして、本市では八潮高校周辺の土地を活用した計画や事業を計  
画、検討しているという経緯もありますので、この協議しながらという部分につ  
きましては、是非、よろしくお願ひしたいと考えております。

依田委員長 はい。それでは、事務局、いかがですか。

事務局 現状では県有財産ですので、学校が校舎を閉じる場合、まず、埼玉県として  
他に活用がないかを検討します。オール県庁で検討しますが、次の段階になったと  
ときには、市町の皆さんとも話し合いをしながら考えていきたいと思います。今、  
今、そういったお話が出ているということであれば、しっかりと丁寧に対応  
しながら、良い形でやっていけたらと考えております。

依田委員長 はい。他、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。それでは、一通り  
御意見をいただいて、通したのですが、今年度、この計画について御意見をいた  
だくのが最後になりますので、本日まだ御発言をいただいている委員から何かあ  
りましたら、一言ずつと思っております。まず、栗田委員、全体を通して何かご  
いますか。

栗田委員 時間の問題もあるかと思ひ、いちいち言いませんでした。この計画を進め  
ていく上で一番問題なのが、生徒募集だと思ひます。普通科 120 人、ビジネス探究  
科 120 人を、果たして本当に確保できるのかということですが、むしろそれ以上  
に来る、倍率が 3 倍、5 倍、10 倍になるというような計画を立てて、いわゆる本  
当に魅力ある高校をつくっていかねばならないと思ひます。今、子供が減ってい  
るとはいへ、子供が減っている、八潮だからみんな通り過ぎるという、いわゆる外  
的な要因というのは最初から分かっているわけで、そのせいにして、仕方ないよね  
というのは、これはどこでも言われることです。でも、最初から分かっていること  
ではなく、だからこそ、どういう対策を練るかということが、いろいろなところ  
でなされていくと思ひます。中小企業なんかは特に人手が足りないという状況もあ  
りますが、それでもなぜ来るのだろうかということもあります。それは、やはりそ  
こにマッチした人たちがやって来るということがあるので、新校にマッチした人  
たちをターゲットにして集める、その知恵出しをどこかで一生懸命なさると思ひ  
ますが、全体を見ていて、なんでだろうと思ひることがあります。大学の方でも、  
ほとんど学校推薦も終わりましたし、今はどこの大学も推薦でほとんど決まっ  
ています。今年、少し変わったことがありまして、実は昨年、うちの大学に、  
一つの高校から十数名来ていました。それが今年は何人になりました。とても  
不思議です。3 人が 0 人になるということはあると思いますが、十数名が 0  
人になるのはなぜだろうと思ひ、この高校に聞いてみました。そうしたら、  
本当に、特に理由はないということでした。例えば進路指導の先生が代わった  
とか、何かそう仕掛けたとか、あるいは自分の近隣の大学、みんなが行く  
大学で、何かポイントを付けたとか。例えば、〇〇高校で

〇〇の資格を持っていたら、奨学金を出しますよ、10万円出しますよ、だからうちに来ませんかというようなことをすると、奨学金がもらえるんだったら行こうかなと思いますよね。そういった仕掛けがあったのかなと思ったら何もない。どうも、インフルエンサーがキーワードではないかと。最近、インターネットで広告を打ったりとかではなく、良いらしいよとなったらサーとそちらに行く。子供たちの中でそれが決まっていくようなところがあるので、いわゆる、子供たちに向けて、どれだけ魅力があるかということをし掛けていく必要があると思います。そこはまた違ったところでお話しされると思いますが、そこをしっかりとっておかないと、全てがなくなってしまいうというのがあります。本当に240人集められるのか、500人集めるくらいのつもりでいきたいところもありますが、実際、この辺に住んでいる子供たちの数や、それから他に行ってしまう数もあると思いますが、そうではなくて、よそからこっちに引っ張ってくるくらいの、何か尖った策を練ると良いかと思います。それは、大学の学生募集と似ております。これはまた話すと長くなってしまいますが、資料1の4ページ、生徒募集のところに、生徒募集の方向性がいろいろ書いてありますが、ここのところを具体的に、いろいろな人から出してもらった方が良いと思います。そうすると、突拍子のないことも出てきますが、今、この辺は中小企業がたくさんありますので、中小企業と連携するとか中小企業にインターンシップに行くということは、普通に考えられることです。それはそうなのですが、今は、対面とオンラインを混ぜたハイブリットの授業ができると思います。それから、ビデオ教材を活用するといったこともできるので、中小企業とつながるという意味で、この辺の中小企業はアジアの方にも、結構お客さんがいたりすると思います。だから、国際化ということをごここで打ち出すのであれば、ただ中小企業とつながるのではなく、例えば中国とつながる、そして、高校では中国語の勉強もやるよということも。英語が苦手な子も多いと思いますが、一から中国語を勉強するというのはなかなか面白くて、そういった真新しいことをやったらどうかなと思いました。この間、私は中国に行ってきましたが、びっくりしました。日本で作ったQRコードがあんなに使われているのかということで、お金も全然使わない、カードも使わない、リンゴ1個買うのも全部QRコード決済です。そういったことを目の当たりにするような修学旅行も良いなと思ったり、実際に行く前には、例えば、行く先の企業などもオンラインでつながってみる。それから中国語の単位も出す、スペイン語の単位も出すということを選択授業でやるのも良いかなと思いました。そういった、何か突拍子のないものを企画案として出して、どうせ潰れると思いますが、そんなようなものを出して、新校は全然違うよねと。中小企業は周りからこそ、何かそういったことをやったりするのが良いのかなと思いました。それが新校の強みになると良いと思います。それから、先ほど岐阜商業高校の話が出ましたが、私も見に行きました。株式会社、やっていました。ショッピングモールで何か作っていました。正直に言うと、ここを工夫しているなとか、これはいただきというところは、余りなかったです。やはり主体性を持ってやるということが、アントレプレナーシップでも社会人基礎力でも一番重要なところで、主体性を持ってや

るところを尖らせていく、そういうところを、是非、売りにできないかと思いました。ですので、そもそも二つを一つにするという理由はなんだったかと思ったりもしましたが、何か原因があるから二つを一つにする、二つを一つにして、かつ、一つにしたら魅力ある学校にするというところを、いつも忘れないようにしながら参加しています。ではどんな案があるのかということは、また時間を取ってお話できれば良いかなと思います。また、一緒に視察に行った、私の大学に研修に来ている先生と二人で、黒板に書きながら、会社を作って、ではここをどうするか、ボリュームをどうするか、指標はいくつ作るのか、ものはどうするか、売れなかったらどうするかといったように、株式会社の構想を練っていて、それは一番最初に勉強するという初学者向けの設定にしたのですが、実は誰でも良くて、管理職がこれを勉強しても良いし、初めてお金を持って会社を作るという人がやっても良いしと言いながら進めているので、これを、来年の3月までに必ず形にしようと今、話しています。そもそも、社会人基礎力やアントレプレナーシップなどを踏まえた型にしていかないといけないねと話していますが、なかなか固まっていない状況です。

依田委員長 いろいろ御意見を賜りましたが、事務局から栗田委員に、事務局の考え方と言いますか、決意も含めて、新校の開校に向けて、今後、教育課程などを検討するという話が事務局からありましたが、その中でどのように考えているのか、お願いします。

事務局 はい。この二つの学校の統合は、第2期実施方策の基本方針のところ書いているように、ビジネスの学びのパイロット校、県内の新しい試みのパイロット校として、先進的な取組をしていきたいということ、最初に掲げてスタートしています。今、いろいろな形で、取組を開発していると言いますか、生み出そうとしているところですが、是非、皆さんの期待に応えられるような、魅力ある学校づくりを進めていきたいと考えております。そういう意味では、栗田委員にはいろいろと御指導いただければと思いますので、よろしく願いいたします。

依田委員長 よろしいでしょうか。はい。それでは、藤波委員、何かございますか。

藤波委員 これは生徒指導なのか教科指導なのか分かりませんが、起業する、株式会社を設立するということですが、企業というのは法人、人ですので、社会の中でどういう意義があるのかというところを、ちゃんと、その辺は強く指導していただきたいと思います。今、盛んに言われているSDGs、存続する、将来的に何ができるのかというところで、生徒指導になるのか設立する会社の中での方向性になるのか分かりませんが、会社ですので、利益は出さなければならない。ただ、利益を出すということは、税金を払うということです。社会のために税金は必要なんだということ、ビジネス探究という言葉を使うのであれば、その辺をもっと、会社というものはどういうものなのかというところを。起業するだけでなく、社員として働く人たちも、少しずつでも、自分たちがやっている仕事の方向性が社会のためになるんだということを理解しながら仕事していただくと、発展性があるのかなと思います。あとは、栗田委員がおっしゃったように、本当に、何が魅力なのか、魅力とは何なのかというところ、そこをもう少し、時間もあるでしょうから、いろいろと

深く探究していくと良いのかなと思います。

依田委員長 はい。ありがとうございます。この後、教育課程を考えていく上での重要な視点かと思いますが、事務局、いかがでしょうか。

事務局 社会人基礎力やアントレプレナーシップなどを、この学校の柱として掲げているわけですが、まさに、人が生きていく、世の中に関わっていくというところで、どんな形で貢献できるのかということを考える、しかも主体的に考えるということが重要だと考えています。誰かによって何かをさせられる、ではなく、自らの、という部分を大事にしていきたいと思っています。この学校を卒業した生徒たちが、実際に起業してみようかと、会社を興してみようと、本当に思ってくれるような、そんな卒業生を出していきたいと思っています。

依田委員長 よろしいでしょうか。それでは、福良委員、いかがでしょうか。

福良委員 私は小・中学校で給食を作っているのですが、残った給食の状況を見ると、明らかにいっぱい残っているクラスが多いです。栄養士に聞くと、不登校の生徒が増えているということだそうです。そういう意味で言うと、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーということをもう少し具体的に、個々の生徒に合ったということ。中学校までは、基本的に市内や区内から生徒が来ます。でも、高校や大学になると、全県もしくは全国から通ってきます。そうすると、住んでいるところや育った環境が違うと思うので、少なからずいじめなどが出てくるかと思っています。そういったことに対して、もう少しスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、あとは家庭との連携を密に。今の世の中、テレワークなどが増えていると思うので、変な話、そこで、大人の溜まったストレスのはけ口はどこになるのかとなったら、絶対に子供になると思います。その辺を、深く踏み込んでしまうと大変なことになるかもしれませんが、柔らかく突っついていくという形で、それこそ、もしも子供が自殺したということになってしまうと、児童相談所や保護施設などが結局は踏み込めなかったということで、その子の命はどうなるんだという問題もありますし、コロナになってから、余計に人と接する機会が減り、コミュニケーション能力が今までより低下している部分もあるのではないかと思います。その辺り、もう少し強調して、具体的にスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーを付けていただくと良いのかなと思います。あとは全くこれとは関係ないですが、ずっと思っているのが、この先も高校の統合は絶対に出てくると思います。そのときに必ず出てくるのは、すぐ近くにある高校はどうなっているのかということです。やはり、学校の関係者としては必ず比べてみたくになります。自分の学校が統合しますと説明を受けたときに、じゃあ周りの学校はどうなんですかと聞いたときに、周りの学校について、県から話がありませんでした。出てきたのは、羽生や熊谷など北部方面の話でした。草加市や三郷市など八潮市近辺の状況を聞いたかったのですが、全然違う話だったので、それだと比べようがないので、もう少し、対象校の周辺の高校の状況についてお話しいただかないと、今後、統合の話になったときに、対象校の関係者や卒業生は絶対に納得できないと思います。今後、人がいなくなっていくのは仕方ないことだと思いますので、その辺をもう少し詰めていただ

けると、話が進みやすいのかなと、今回の件で思いました。

依田委員長 大きく2点ございました。2点目のお話については、私の方で承知させていただきました。今後、様々なことで、八潮南高校と八潮高校の経験が、福良委員がおっしゃったように、他の学校の参考になることもあるかと思しますので、必要に応じて、また御協力いただくこともあるかと思います。

福良委員 よろしくお願ひします。

依田委員長 1点目、スクールカウンセラーなどについてももう少し具体的にというお話がありましたが、これは、ここの表現というよりは、今後の教育活動の検討の中で、ということでしょうか。

福良委員 そうですね。今後の検討の中で、新校ができたときもそうですし、今後つくる学校でも既存の学校でも、やはり、おのずとそういう問題が出てくると思います。それが表に出るか出ないかの違いだけの差だと思ひます。大人に話しても仕方ないよねと。コロナ禍になってから、大人と会話する機会が少なくなってきています。そうなると、自分の中で自己完結しようとして完結できなくなると、最終的に誤った方向を選んでしまうということもあるのかなと思ひます。少しずつ、何かしらの信号は出していると思うので、そこを見抜ける専門の方を増やしていただければ、増やしていただいた方が良く思ひます。新しい学校でもそうですし、ここだったらそういうのが魅力だから、中学校で様々な困難を抱えていたけれども、高校からがんばってみたいという生徒が増えてきたら良く思ひます。それも生徒募集の一つの強みなのではないかと思ひました。

依田委員長 分かりました。来年度以降の新校の開設準備の中の話ですが、福良委員の御発言について、事務局はどのように考えますか。

事務局 今回のこの最終的な計画案の中にも、文言として位置付けられた形になっています。準備委員の皆さん、あるいは学校の職員などから成る基本計画検討委員会もそうですが、この二つの学校に関わっている人たちから、是非こういふことを入れてほしいというお話が、学校からもそうでしたし、上がってきていて、こういふ形に、文言として仕上げる事ができています。この話は、八潮新校に限らず、埼玉県全体、あるいは日本全体の課題でありまして、福良委員のおっしゃるとおりだと思ひます。とても大事なところで、恐らくこれまで、そういった専門職の方を学校にたくさん配置するということがなかなかできないでいたということもあり、県の教育委員会などでも、少しずつ予算を拡大しながら、専門家の配置については心を砕いているところです。是非、新しい学校が、そういった先進的な取組につながれるように、校内的にも、そうした相談体制や、生徒の悩みが小さい段階からうまくほぐしていけるような体制をつくっていきたく思ひしております。この後、来年度からの準備の中でも、その辺をしっかりと議論していきたいと思ひしております。

依田委員長 はい。福良委員、お願ひします。

福良委員 そういう部屋、教室を設けるだけというのはやめてほしいです。教室だけ設けて、結局、そこに行った生徒が、何かあるのではないかとなり、それがいじめの対象に発展する可能性はあると思ひます。それでしたら、校長室の中に一室、少

しだけスペースを設けたり、職員室の端の方にスペースを設けるという形にしていた方が、行く方も行きやすいと思います。あらかじめ、スクールカウンセラー室みたいなものがあると、どうしても、そこで、自分には何か問題があるのか、周りの目もあって行きづらいということになってしまうかと思うので、そういう専門の部屋は設けない方が良いのではないかと思います。

依田委員長 そういった生徒への配慮ということですね。事務局の方で、どのように考えますか。

事務局 そういった配慮はしっかりしていく必要があると考えております。カウンセリングの手法や、臨床心理学的にどういうアプローチの仕方が良いのかといったところこそ、専門家の知見が必要だと思えます。そういったスタッフをたくさん用意できるようになってくれば、この生徒にはこういうアプローチが良いなど、様々な方法が出てくると思えます。実際に、埼玉県内の学校には、教育相談の部屋を設けているところもありますが、福良委員のおっしゃるような、生徒が逆に行きにくくなってしまいうということも、実際にあるのかもしれない。ですので、是非、そういったところは、専門家の皆さんと連携しながら、何が生徒にとって良いのかということ、一つ一つ、ケースごとに、丁寧に対応していける体制を作っていきたいと思えます。

依田委員長 よろしいでしょうか。はい。廣川委員、何かありますか。

廣川委員 県の魅力ある高校づくり課の課長の廣川です。委員の立場で参加させていただいております。多くの建設的な御意見をいただいたと思っています。生徒募集や学科など、今お話があった中では、社会の中における企業の意義みたいなことをしっかり学べるような学校、より多くの人たちと関わり合いながら学んでいけるような学校になると、生徒たちが意欲を持ったり、わくわくしながら学校に来られるような、そういった学校になっていくのかなと思ったところです。本日お集まりの皆さんには、引き続き、いろいろな人との関わりという中では、御協力いただく場面が多々あると思えますので、引き続き、良い学校になるよう、是非、御協力いただきたいと思えます。

依田委員長 はい。それでは、これまで御発言いただいた方も含め、全体を通して、何かこれだけはということがあれば、いただいてまいりたいと思えますが、いかがでしょうか。はい。栗田委員、お願いします。

栗田委員 最後に一つだけ。実際に運営するのは、現場の先生方です。なので、現場の先生方の新校に対する期待感というのが、例えば、こういうふうにしたいとか、一つだけでも良いから何か案を出してくださいとかそういう前向きの、生徒たちは主体性を持って学んでいきますが、新校で教鞭を取られる先生方が主体性を持てるような取組は、何かやっていくのでしょうか。

依田委員長 そうですね。事務局というより、この案をまとめているのは、現場の先生なんですね。それに対して各委員から御意見をいただいて、それを先生に返して、先生方がまた議論をして、また各委員に御意見をいただいて、というのを3回繰り返しているという意味では、先生たちが主体的に、こういうことを考えてきて、そ

れに対しての御意見を伺っておりますので、まさに、先生たちが主体的に取り組んでいるとお考えいただいて間違いのないと思います。

栗田委員 分かりました。少人数ではなく、先生方をまとめていく校長先生がいて、その下に主任の先生方がいて、ということかと思いますが、結局はその負担がすごく大きいと思います、新しいことを始めるときには。その負担が大きいと、将来自分がこういうことをやりたいという気持ちが減っていくと思います。だから、最近の若い方たちは、別に、という感じになってしまうので、是非、自分で新しいことをやっていきたい、もっとこういう企画を立てていきたい、そういうことを思うような若い先生たちを。そちらの方向に持っていけるような方法については、分かりませんが、やはり若手を育てていくという意味では、新校をつくる機会はすごく良いチャンスだと思います。現場感覚では、なるほど、それはそうかもしれないけどということもあると思います。それは、いろいろな現場で若い人たちを育てていかなければならないということもあるので、新校はすごくチャンスだと思うので、若い先生たちを育てられるような、何か仕掛けがあれば良いと思いました。

依田委員長 御意見については、最後に、両副委員長からお話をいただきますので、よろしくをお願いします。その他、いかがでしょうか。はい。福良委員、お願いします。

福良委員 10 付随する事項の(3)対象校が保管する物品等の保存についてですが、八潮高校の卒業生から、学校に寄贈していただいているものがあります。それについては、新校の方で、是非、継続して使っていただきたいと思っています。50周年で、同窓会やPTA、学校側から出したものについては、どうしても使い切れないものもあります。それに関しては、県内でも全国でもどこでも良いので、他の学校で使えるというのであれば、そちらで使っていただいて、どうしても、個人的に寄贈されているものに関しては、そのまま、新校になったところで使っていただきたいというのが、同窓会としての意見です。その辺をお願いしたいと思います。校長先生や理事会に出ている先生方にはお伝えしておりますが、こういうところでもお話ししておいた方が良くかと思ってお話しさせていただきました。申し訳ございませんが、よろしくをお願いします。

依田委員長 はい。これは、八潮高校の同窓会としての御要望ですね。これについては、両校で話し合いながら進めていただければと思います。

福良委員 よろしくをお願いします。

依田委員長 その他、いかがでしょうか。はい。北島委員、お願いします。

北島委員 栗田委員と同じようなことになってしまいますが、魅力ある新校をつくるということですが、その魅力というのは、入ってきた子どもたちが、これから先生と一緒に作り上げていって、初めて魅力と言えるのではないかと思います。私は保護者目線なので、こんなに難しい言葉でたくさん書いてあって、親御さんは多分見ないと思います。私たちが見ても、うーんと思うような文字が並んでいるので、表に出すときは、明確に、短い文で出していきたいというのがあります。あと、教職員に関しては、このまま残っていただける先生方もいらっしゃると思いますし、

新しく入ってくださる方もいらっしゃると思いますが、意気込みや、こういうふうと一緒に作り上げたいという理念をしっかりと理解して、子供たちが楽しい、入って良かったと思うのは、やはり先生とのコミュニケーション、もちろん友達とのコミュニケーションもあると思います。今、私たちがこうやって、親や大人の考えでこういうふうにさせたいとか、こういうふうに育てたいとか、そういう言葉をたくさん目にしていますが、結局は、日々の子供たちと先生とのコミュニケーションだったり、毎日の流れで作り上げていくものだと思います。なので、それを、入ってからではなく、それこそ今できるのはSNSなどを通じた発信だと思います。それを、もう少し早めに、今、こういうふうにやっていると、もちろん新校のホームページを作っても良いと思いますし、こういうふうにやっています、今日はこんなことをやりましたというのを、どんどん発信して行って良いと思います。八潮市に住む地元の中学生は、近い高校、友達がいる高校に行きたい、そうでなくても、草加市からも来たいという中学生はたくさんいます。その中には、八潮高校がなくなってしまうから八潮南高校にという流れもあるかと思うので、それはなぜなのかというと、やはり近い学校でということだと思います。そうではなく、近いし、ここだよという魅力を、入ってからではなく、新校を立ち上げていくので、その前から、どういうものなのかというのを、もっとパッと目で見えるようなものを。それこそ口コミで、生徒もそうですが、インフルエンサーとしては保護者もすごいです。良いことも悪いことも。ですので、もしかしたら悪いことも言われるかもしれませんが、そういうものも活用していければということ、PTA、後援会も含めて考えていけるのではないかと思います。もう1点、後援会と同窓会についてはそれぞれの会でということですが、今回が初めてですので、どういった流れでやっていけば良いのか分からないので、御指示、御助言がありましたら、導いていただきたいと思います。

依田委員長 これは事務局に伺いましょう。今の北島委員の発言について、お願いします。

事務局 魅力ある県立高校づくりということでは、この八潮新校については、本当に多くの県民の方、地域の皆さんが期待していると思います。先ほど北島委員からもお話しいただいたように、この計画案は非常に行政的な文書になっていて、県民の皆さんに広く約束するものにはなりますが、具体性が乏しかったり実感が湧かなかったり、その辺りは、この先、生徒募集が一番大事だというお話がありましたが、そこは本当に力を入れてやっていくべきだと思います。第1期で開いた児玉新校や飯能新校も、まさにその部分を本当に、学校の職員が精力的に取り組みました。教員がちゃんとがんばってくれないと、というお話が先ほどから出ていますが、私も事務局から見ますと、六つの新しい学校が動き出していますが、本当に、先生たちのモチベーションが徐々に高まってきているのを実感しています。やはり、教員は子供たちが好きですし、良い学校にしたいという思いはすごく強いです。新しく学校をつくるということは、人口が減少していくこの時代の中にあっては、なかなかチャンスがなく、ですから、本当に嬉々としてやっている職員もいます。特に若

手がそういう気持ちを強く持ってやってくれています。ですので、そうした良いモチベーションの高まりの中で、学校づくりが進んでいくことを、私たちも望んでいますし、バックアップしていきたいと思っております。最後に、後援会と同窓会を今後どうするのかというお話がありましたが、記載のところを読みますと、それぞれの団体でと書いてありますが、具体的には、それぞれの校長先生に、是非、御相談いただいて、校長から私たちの方に相談が来る場合もありますし、校長の段階でうまい具合に、どういうふうに引継ぎましょうかとか、どんな形で活動を続けていきたいと思いますかということで、対応していただけたらと思っております。

北島委員 八潮高校は普通科と体育コースで成り立っていますが、新校では全て普通科になると思います。この案をずっと読んでいて、お話を聞いていると、アントレプレナーシップとあると思いますが、これは、ビジネス探究科にすごくフォーカスされている感じがして、普通科ではこれをどういうふうに取り入れていくのかということがいまいち、普通科に行く子たちには関係ないと捉えて良いのか、それを普通科でも取り入れて、進学等の際のメリットになるようなことがあるのか、そういった部分もあるのかなと思っておりますが、この中にそれが見つけられなかったので、普通科に来る子たちに対しての特別なものが何かあれば良いなと思いました。起業家精神とたくさん書いてあるので、商業系の学校というイメージが、保護者に対しては強いかなと思いました。

依田委員長 大変重要な御意見だと思えます。起業家精神についての解説か何かは必要かもしれないですね。今、北島委員がおっしゃったように捉える方はいらっしゃるかもしれないですね。起業家精神と普通科について、事務局の考えを御説明いただけてよろしいですか。

事務局 ビジネスに特化した学校というコンセプトの中で、このアントレプレナーシップという言葉が出てきておりますが、アントレプレナーシップというのは、会社を興す技術的なことを学ぶという意味合いで捉えられることが多いので、なんとなく、ビジネスの話、商業の話、つまり、普通科ではない話と捉えられがちです。ですので、そこをしっかりと我々も伝えなければいけないと思えますし、この先の新校開校準備の中でも、そういったPRをしていくべきだと考えていますが、アントレプレナーシップというのは、普通科、商業科に関係なく、ある意味、全ての高校生に言えること、大事な精神だと思っております。先ほど言ったように、技術的に会社を興す手法だけでなく、心的な態度と言いますか、果敢に挑戦して、しかも誰かからやらされるのではなく、主体的に、自分からやっていくという意味では、普通科や商業科という垣根はないはずで、そういったところをしっかりとPRしていきけるようにしていきたいと思っております。

北島委員 そうすると、起業家精神という言葉がネックになってくるのではないかと思います。訳を分かりやすく書いたりすると良いのかなと思えます。

事務局 そうですね。まさにそういうところだと思います。どうしても、この訳語なので、会社を興すための技術みたいなものを学ばせるという意味合いが出やすいのですが、今、私が話したようなことは、文部科学省が言っていることを解説したつ

もりですが、技術的なものだけではなく、心的な態度がとても大事なんですということで、要は、万人に必要な考え方ということです。栗田委員からも、そういう形で教えていただいております。

栗田委員 補足してよろしいでしょうか。アントレプレナーシップと言った方が良いかもしれません。起業家と言うと、普通の企業の方をイメージされがちですが、起業家の起は起こす方の起です。起こすということは、会社だけでなく、私たちの人生もそうですし、分野に関係なく、新しいことをやろうよと、主体的にやろうよと、人を説得しようよと、聞かせてあげようよ、全て、どんどん前に進んでいくために必要なもので基本的には全て共通するものです。ただ、起業家と言うと、一般的には多分そちらにいきそうになるので、おっしゃったように、一つの絵でパッと分かるように、例えばこんな力、こんな力というのがあって、それが全部起業家精神。起業家というのはネーミングが良くないんですね。だから、アントレプレナーシップが良いと思います。ここはアントレプレナーシップ。それから、社会人基礎力というのがありますが、この基礎という言葉が、以前も私はこの場でお話したかと思いますが、基礎ではなくて基本なんです。だから、ベーシックではなく、ファンダメンタルなんです。ですので、本当に基本的なもの、人に嫌な思いをさせてはいけない、人に会ったら挨拶するといったファンダメンタルなことを育成するわけです。それからどんどん前に主体的にものを起こして行って、リーダーになっていくようなことができる子たちを育てるというのが、この新校だと思っています。ですので、研修に来ている先生とも話をしましたが、検定試験はなくさないでと言っています。商業科では検定試験が中心だということですが、これは、子供たちからすると、すごく達成感があります。普通高校にはそういうことがないので、どんなに小さなものでも良いから、達成感を得られるものにプラスして、ファンダメンタルの部分と起業家精神の部分を混ぜていくと、すごく良いものできていくと思います。検定試験はお金もかかりますので、うちの大学でも考えていますが、例えば学長賞や学部長賞など、賞状は印刷すれば良いだけなので、そういう意味ものをあげる。小学校1年生がきれいなお花のバッジを付けるような感じで、そういったものを学校教育の中に入れて行って達成感を持たせていく。そういった仕掛けは、現場の先生がやると思いますが。ですので、社会人基礎力とアントレプレナーシップについては、うまく取ったなと私は思います。スポーツなんかにももちろん、その意識を変えていくように、そこにも何か仕掛けが必要かと思っています。

依田委員長 私の進行が悪く、予定の時間を過ぎてしまいました。北島委員がおっしゃったアントレプレナーシップについては、確かに、誤解を招く部分もありますので、この辺の語句については、分かるような配慮をしていきたいと思っております。それでは、よろしいでしょうか。いろいろと多様な御意見をいただきましてありがとうございます。大きな方向性として、私の方で預からせていただき、両副委員長と一緒に、最終的な案を、皆様からの御意見を踏まえて策定していくということでよろしいでしょうか。

(了承の声)

依田委員長 はい。ありがとうございます。そのようにさせていただきたいと思えます。それでは、最後になりましたが、副委員長である両校の校長から一言いただいて、終了させていただければと思えます。

白井副委員長 八潮高校校長の白井です。校舎を閉じる学校の校長として、一言、申し上げます。八潮高校は、50年以上にわたり、PTA、後援会、同窓会をはじめ、多くの方々に支えられ、また、地域に愛されてここまでやってまいりました。つい一昨日ですが、同窓会の理事の方にお集まりいただきまして、長時間にわたり、新校について、いろいろとお話をいただいたところでございます。先ほどもありましたが、この後、PTA、後援会とともに、話を進めさせていただくこととなりますが、その際は、私も尽力いたしますので、どうぞよろしく願いいたします。また、校舎を閉じることにつきましては、校長として残念な思いではございますが、令和8年度から八潮南高校と統合し、新校となることに大きな期待を寄せるとともに、新校をつくっていく校長として、大きな責任と自覚を感じております。本校は、普通科の単独校でありながら、体育コースや特伸クラスなど、多彩な教育課程を通して生徒を育て、これまで、11,000人以上の人材を輩出してまいりました。新たな特色ある取組として、先ほど栗田委員からもありましたが、現在、本校ではデータサイエンスに着目して、若手中心の研究プロジェクトチームを立ち上げました。具体的には、先月に、宮城県仙台第三高校の方に視察に行っておりまして、具体的に、探究活動を普通科としてどのように取り組んでいけば良いかということ学び、そして、先週も研修会を実施しました。ということで、新校の取組を、普通科としてもしっかり具現化し、新たな形でスタートを切りたいと思っております。また、この後、閉じるまで2年間ございます。八潮高校の場所で、最後までしっかりと教育活動を行ってまいります。これまで3回の委員会でも、様々な御意見をいただきました。皆様の思いを、県とともにしっかりと受け止め、新校としての更なる発展に尽力してまいりたいと思えます。引き続き、関係の皆様には、御指導を賜りますようよろしくお願いいたします。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

町田副委員長 八潮南高校校長の町田です。本日は、様々な御意見をいただきまして、誠にありがとうございます。令和8年度から、本校の敷地に新校を設立することとなります。したがって、これに向けて準備の方を、いただいた御意見等を十分に踏まえながら、進めてまいりたいと思えます。新校の一つの表現の中に、株式会社の設立ということがあります。これは、やはり株式会社を作るということは大切ですが、生徒が実践的なビジネス教育を行うということが、非常に大切なんだと思っております。先日、本校では文化祭がありまして、生徒は自ら地元の企業から商品を仕入れて、それを販売するといったことをやっております。まだまだ株式会社の設立とまではいきませんが、少しでもそういった実践的なビジネスの部分に取り組んでいるという状況です。また、先日、地域のロータリークラブに生徒とお邪魔しまして、今後の進路、就職関係について、どういう取組をすれば良いか、そういったお話をいただきましてまいりました。八潮高校と八潮南高校、二つの学校が一つになるわけですが、八潮市内で、本当に八潮の学校ということになるかと思えます。

地元との連携、こういったものも、今後も密にしながら新校の開校準備に取り組んでまいりたいと思います。これからも是非、よろしく願いいたします。

依田委員長 それでは、以上をもって協議を終了させていただきます。本当にありがとうございました。